



第1回の時代劇「白波五人男」



第1回の現代劇「盛岡版「結婚の申込」」

特集

—盛岡文士劇とは?—

「文士劇」とは、役者ではなく作家や小説家などが演じる演劇のこと。発祥は明治期。昭和9年に文藝春秋社が読者サービスとして始めた文士劇が広く人気を博しましたが太平洋戦争によって一時中断し、昭和27年に再開しています。

「盛岡文士劇」のスタートはそれに先駆けた昭和24年。作家の鈴木彦次郎氏を中心となって始まりました。昭和37年まで続きながらも、惜しまれつつ休止。しかし、盛岡文士劇復活への気運が高まり平成7年に復活します。新しい盛岡文士劇のスタイルは、現代劇・口上・時代劇の3部構成になっているのが特徴。現代劇はアナウンサーを中心にした出演者による盛岡弁のセリフとアドリブ、時代劇は歌舞伎や歴史ものをベースにした脚本による著名人の迫真の演技が見もので、毎回豪華なゲストも話題です。

日本唯一の文士劇

「盛岡文士劇」の魅力。

演劇や舞台盛んな盛岡

今年で21回目を迎え、今や盛岡ブランドとして誇るべき「盛岡文士劇」。戦後まもなく始まり、現在も全国唯一の文士劇として続くことに盛岡ならではの文化的背景があるのでしようか。座長の高橋克彦さんに伺いました。

「作家の鈴木彦次郎さんが、たまたまその頃、盛岡に居たことは大きいでしょう。彦次郎さんが東京の文士劇を知っていたことで、他地域で盛りあがった市民劇とは違う『文士劇』という発想がすつと出てきた。また、盛岡では明治期以降、常磐津林沖が盛岡芸妓の文化を育てました。芝居も昔から相当盛んだったので鬘（かつら）や衣裳など舞台づくりのプロも地元で受け継がれてきました。さまざまな環境が重なってこそ『時代劇』がやれた。それがなければ市民劇は当時まだ盛んだった新劇の方向にいくのが自然ですが、盛岡の場合は歌舞伎の華やかさを導入して舞台を魅せた。それこそ観客が飛びついた大きな理由だと思います」。

高橋さん自身、中学生の頃に「盛岡文士劇」を観劇、高校生の頃は年末のテレビ番組で東京の文士劇を楽

しんだ思い出があり、会場の雰囲気や舞台の華やかさが強く印象に残っています。

「私が作家をめざした当時、全国放映される文士劇に出ることは作家としての成功を表すもの。同世代の作家たちは皆、地方で文士劇を見て自分もあの舞台に立ちたいと思ったようです。やっと物書きになった頃、東京の文士劇は終わっていました。目標を失ってしまった気持ちでした。だから、盛岡文士劇復活の話を知った時はうれしかったですよ」。

平成7年の復活にあたって、自身も子どもの頃に見ていた文士劇を再現できることに心が躍ったと振り返ります。

復活した「盛岡文士劇」の魅力

現在の盛岡文士劇は現代劇・口上・時代劇の3部制。現代劇は普段標準語で話すアナウンサーが盛岡弁で演じるところに面白さがあります。

「第1回目開催当時、秋田のチェーホフが評判でした。『あれを盛岡弁でやったらどうか』という話が出ましたね。盛岡弁といえば……と松本源



「仲間と一緒に作りあげる芝居は、執筆作業と違った楽しさや達成感がある」と話す高橋さん



文化人、アナウンサー、盛岡市長や地元の名士が出揃う「盛岡文士劇」は盛岡ブランドとして定着(写真は昨年20回開催時)

蔵(カメラのキクヤ創業者)さんの名前が出てきたんです。松本さんの芝居がうまかったの、素人と思えないくらい。ああいう風に盛岡弁でやれば芝居ができるんだとお客様が認めてくれたんですね。松本さんがいなくてアナウンサーだけだったら、違う芝居になっていたんじゃないかと思います。現代劇では大塚富夫さんのカンペ仕込みが定番ですが、この仕込みも松本さんの演技を受け継いだんですよ」。

そう話すのは現代劇の座長を務める畑中美耶子さん。同劇の見所は盛岡弁ですが、アナウンサーにとって盛岡弁は外国語を1から覚えるようなもの。演出の小野寺瑞穂さんと畑中さんの2人が台本を全て盛岡弁で録音し、出演者はCDを聞きまず音でセリフを覚えるのだとか。盛岡弁のアドリブは難易度が高く、畑中さんと大塚さんのアドリブもある程度打ち合わせをしてこそ可能なのだといひます。

一方、時代劇はガラリと雰囲気を変え、本格的な衣裳や舞台も売りの一つ。出演者は皆アマチュアで他に例をみないほど稽古を重ね、時には週に4日稽古することもあるそうです。

「復活当初はセリフを覚えきれずに本番を迎える出演者も多かったのですが、私が高校時代に演劇をやっていたこともあって、やる以上最低限セリフは覚えておかないとお金を



第1部を飾る現代劇について「時代劇に続く舞台を盛りあげ、お客様の様子をつかむのが役目」と畑中さん

払って見てもらおうお客様に申し訳ないと思っています。真面目なんですよ(笑)。10回目あたりからは芝居の軸になる人たちが8割方安定してきて、そこに毎回ゲストを迎えながらやってきました」。

普段は表に出る機会の少ない作家たち。出演者に合わせたあてがきによって個々のキャラクターを引きだす脚本の面白さも同劇の魅力です。

盛岡劇場ならではの距離感

また、会場となる盛岡劇場も小規模ながら独自の空気感があります。

「約500席の客席に居る観客の表情は、舞台上からもわかるんですよ。2階席は遠いイメージがありますが、実際に座ってみると案外舞台に近い。こじんまりとして客席と近いので、お客さんといろんなやりとりができるのが『盛岡文士劇』の面白さですね」と畑中さん。最初に花道を通る間は観客との対話が楽しめる時間であり、できるだけたくさん話しかけるようにしている」とのこと。朝早く並んでくれた方への感謝の気持ちなのだとか。

盛岡劇場という器の魅力について、高橋さんもこう話します。

「盛岡劇場は声の響きもいい。実際にお客さんに届く声より自分が感じる声が高いと、もっと高い声を発しようとして稽古とトーンが違ってしまっている、稽古通りの声で客席に伝わっている感じがします。芝居にはいい劇場じゃないかと思いません」。

「これから先舞台に出なくなっても裏方としては関わっていきたく」と話す高橋さんに対し「まだまだ引退させませんよ」と畑中さん。平成の盛岡文士劇を育ててきた2人は、「いつか東京公演もやってみたい」と将来へ思いを馳せます。



今年の演目は、古典落語をもとにした現代劇「もっぺっこ」、意外性が面白い時代劇「源氏物語」(すでにチケットは完売済)

『あの日から』(道又力編/岩手日報社)

「盛岡文士劇」の脚本を担当する道又力氏編集による、東日本大震災をテーマとした短編小説集『あの日から』が10月に発行されました。4年前の「12の贈り物 東日本大震災支援 岩手県在住作家自選短編集(道又力編/荒巻勇刊)の続編であり、若手生まれの作家12人のアンソロジーです。高橋克彦氏をはじめ、盛岡文士劇」に出演する作家たちも執筆。文士劇のつながりによって実現した企画といえます。巻末にて「物語には人間の内面の深いところに入り込み、もつれた感情を解きほぐす力がある」と解説する道又氏の言葉どおり、14編の作品それぞれ琴線に触れる言葉がちりばめられています。

